



Title	Québécoisの文化的アイデンティティーと英語習得
Author(s)	吉田, ひと美
Citation	大阪大学言語文化学. 2008, 17, p. 239-252
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77858
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Québécois の文化的アイデンティティーと英語習得*

吉田 ひと美**

キーワード：文化的アイデンティティー、家庭使用言語、英語習得レベル

Quebec is known as the only province in Canada which prescribes that French is the only official provincial language. One of the major concerns in this society involves the issue of language attitude and cultural identity of Quebecois. Taking account of the relationship between target language, learners, and the society which learners belong to (Heller 2005), and also research based on the socio-cultural approach (Norton 2000), this study was held in the provincial capital, Quebec-City. This paper particularly highlights Quebecois who deal with another language besides French at home, and explores what effect their language experience has on their English learning and cultural identity.

A questionnaire was adopted as the methodology, and executed in an institution for higher education (Cégep). In total there were 146 subjects, 10 of which use another language besides French at home. By comparing these 10 (hereafter named multi-language students) with the remaining 136 who speak only French (hereafter named French students), English learning and cultural identity of multi-cultural students were demonstrated.

Consequently, the significant relevance between language acquisition and integrative motivation (Gardner 2001) was supported. In addition, the present study found that multi-language students have high integrative motivation. This fact could be interpreted as showing that multi-language ability diminishes bias against different cultures. And such a trait in multi-language students would improve their learning attitude and adaptability against differentia or new environments.

As for identity, the data collection confirmed that all the subjects hold strong ethnic identity. However, in terms of 5 identity traits assigned as the annalistic viewpoint, results from the two groups diverge from each other in 4 traits out of 5. It is especially worthy to mention that multi-language students perceive that identity is not based on only language.

* Cultural Identity and English Acquisition of Québécois (YOSHIDA Hitomi)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

Also, the fact that multi-language students showed better comprehension of historical events and anniversaries in Quebec could be a great reference to the strong integrative motivation they have. To conclude, this study demonstrated how learners' language environments influence their English learning and cultural identity. And, moreover, these findings are dependant on the language used at home in addition to French.

1 はじめに

1 はじめに

ケベック州¹⁾という英仏二言語社会において、モントリオール市では、教育システム、言語政策の変遷、とりわけイマージョン教育を柱とするバイリンガル教育の研究により、英語に対する好意的な取り組みが計られている。しかし、二言語をめぐる政治的、歴史的、法律的な切り口で議論が重ねられるとき、英語に対しては否定的な態度がとられることが少なくない (Taylor 1991; Larrivée 2003)。ケベック州の州都で、フランコフォンが大多数を占めるケベック・シティーは、古くからフランスとイギリスの植民地争いの戦争が繰り返された街であり、イギリス軍の勝利に伴い、英語を母語とする人々が多数入ったにも拘わらず、現在でもフランス文化を色濃く残している。当市でも、近年、学校英語教育が幅広い学年に導入され、政策的に英語教育が推進される傾向がある。第二言語習得において、動機づけと言語習得の相関性が強調されるなか (Gardner 2001; Dörnyei 2002)、ケベックのように学習言語に特別な感情を抱く地域において、学習者と学習言語の関係や学習者の社会と学習言語の関係といった、社会文化的コンテクストに密着した研究 (Norton 2000) が重視されている。本稿では、ケベック・シティーにおいて、家庭使用言語をフランス語のみとしないケベコワ (Québécois)²⁾ の若者を対象に、彼らを取りまく言語環境が英語習得と文化的アイデンティティにどのように影響しているのかを探求する。

2 研究における重要概念の定義

2. 1 英語習得と動機づけ

英語習得において、動機づけとの強い相関性が強調されてきている。そこで、言語習

¹⁾ ケベック州政府の公開情報によると、カナダのフランス語系の人口の 86 % はケベック州の住民である。現在 720 万を超えるケベック州の人口のうち約 8.2 % が英語を、80.2 % がフランス語を母語としており、フランス語と英語のバイリンガルは 40.2 % である。Canadian Statistics Census (2001) 参照。
<http://www40.statcan.ca/101/cst01/demo11b.htm?sdi=quebec%20population%20language>

²⁾ Québécois とは、ケベックにおけるフランス語の状況と言語権について調査することを目的に 1968 年に創設されたジャンドロロン委員会 (Commission Gendron) の報告書によると、ケベックに居住する者 (フランコ・ケベコワ、アングロ・ケベコワ、他の出自または移民のケベコワ) とされている。

得の考察の視点として動機づけに着目する。Gardner and Lambert (1972) は、L2 学習の動機づけとは、学習者のコミュニケーションの必要性和 L2 の社会に向ける態度によって定義づけられる複雑な現象であり、言語間の社会的原動力や権力関係に影響されると述べた上で、統合的動機づけと道具的動機づけの二つの目標観を区別した。同様に二項対立で捉えられる枠組みとして、内発的動機づけと外発的動機づけがあるが、統合的動機づけ、道具的動機づけとの関連はあまり明らかにされていない。それぞれの動機づけの要因の特徴を以下にまとめた。

表 1 従来の動機づけの枠組み

〔	外発的動機づけ (External)	外的報酬や他者からの強制、罰をさけるために活動をするような動機づけであり、周囲により理由づけられる動機づけ
	道具的動機づけ (Instrumental)	目標言語を他の目的を実現するための道具として学ぶ動機づけ
〔	内発的動機づけ (Internal)	その活動すること自体が内的報酬となるような動機づけであり、純粋に自発的に生じる動機づけ
	統合的動機づけ (Integrative)	目標言語社会にとけ込もうとする動機づけ

(長沼 2003) 参考

道具的動機づけは外発的動機づけと対比されるが、目標言語を自己の目的達成のための道具として使用したいという道具的要因は、内発的要因を含む可能性がある。たとえば、L2 を道具として使いこなしたいという道具的要因は内発的に生じていると考えられる。しかし、ケベックのような英語に対する複雑な感情が存在する社会において、目標言語を道具的な要因として短絡的に捉えることはできないと考え、外発的要因を採用する。一方、統合的動機づけは内発的動機づけと対比される。また、本研究では社会文化的な視点に立ち、フランス語社会に生活するケベコワが英語社会あるいは英語文化にどのような態度を示すかを考慮し、外発的動機づけに対峙する要因として統合的動機づけを採用することとした。以上より、本研究では、外発的要因と統合的要因の二つの側面から考察する。

2. 2 アイデンティティー

Norton (2000) は、アイデンティティーを学習者個人の性格や性質として捉えるのではなく、学習者が身を置く社会の権力構造に照らし合わせて解釈される必要があると強調している。つまり、学習者について考えるとき、日々の社会的インタラクションによって構築される複雑な社会的アイデンティティーを宿していると認識するべきであると指摘する。本研究では、Québécois が身を置く社会の二言語をめぐる権力構造に配慮す

ると同時に、アイデンティティーは、その国、地域だけでなく、世代や性別、時代のコンテキストによって変化するという解釈にもとづく。

3 ケベック州の社会文化構造の生成とその経緯

3. 1 ケベック・シティーの歴史的経緯

インディアンやイヌイットなどの先住民が住んでいた現在のケベックの地域は、1534年にフランス王フランソワ1世の命を受けたジャック・カルチェが上陸しフランス領となった。しかし、1759年に英仏戦争でフランス軍は大敗し、パリ条約（1763）で英国の植民地州とされた。その後も英国領でありながらフランス的社会の存続を保証するケベック法の制定（1774）により、フランス民法の維持・信仰の自由・フランス語の使用といったフランス的な英国植民地州として存在することとなった。

ケベック州では、1960年以降フランス語化を進めるための政策、つまり言語政策を導入している。言語観、言語意識の大きな変化は、この時期に迎えた「静かなる革命（Quiet Revolution）」に始まる。このケベック・ナショナリズムの台頭を受けて、カナダ政府による1969年に公用語法（Official Languages Act）が發布され、カナダ国内でフランス語と英語の社会的立場が保障されたが、ケベック州議会は更に1977年に、法令101（Bill101）として知られるフランス語憲章（The Quebec Charter of the French Language）³⁾を制定し、ケベックの公用語をフランス語一言語に定めた。こうして急進的なケベック・ナショナリズムが続いたが、1995年頃から、以前から増加傾向にあった英語系、フランス語系以外の移民の流入が進み、フランコ・ケベコワが多く住む地域とそうでない地域との意識の違いも生じアングロ・ケベコワとフランコ・ケベコワの言語・文化をめぐる闘争は続いている。

3. 2 ケベック州の英語教育とケベコワの英語能力

学校教育改革が大きな動きを見せる90年代まで、初等教育（elementary school）4年生から中等教育（Secondary school）修業まで8年間義務づけられてきた英語教育は、1997年に高等教育（Cégep⁴⁾ = college）修業時まで引き上げられた。更に1999年には初等教育の3年生、2006年には1年生からの早期英語教育が始まり、現在では14年間義務づけられている。表向き、英語履修学年の拡大をはかることで、州の教育方針の

³⁾ この憲章は、ケベック州内の公的空間のおよそすべての領域で、フランス語の使用を求める内容となっている。州政府と市民との間の行政的なコミュニケーションではフランス語が専ら使用されるほか、民間企業でも一定の従業員規模を有する場合、フランス語の使用が妨げられない職場環境を整備し、その証明を受ける必要がある。

⁴⁾ Cégepはケベック州特有の教育システムに存在する。日本の高校と大学の間に位置する教育機関にあたる。学生は職業訓練コースか大学進学準備コースの一方を選択する。

国際化を示したが、教育現場の声はこのカリキュラム変革に否定的である。その理由として、開始学年が早まったものの、授業時間数は分割されることになり、実質的な英語授業の総時間数には増加がないことが指摘される。

ケベック・シティーの初等教育、中等教育、大学の英語教師（9人）に学生の英語能力に関するインタビューを行ったところ、まず、最も指摘されたのが、話す / 書くといったアウトプット能力の低さに比べて、聞く / 読むといったインプット能力は高いということであった。ケベコワの場合、身近なところでテレビや本など英語環境に比較的恵まれているためインプット能力はかなり高い。また、英語を話すことを非常に恥ずかしがる、という学生の態度も指摘された。この現象は、普段英語をアウトプットする機会が少ないために起こるのだと考えられる。

3. 3 英語への反応

英語に対するケベコワの反応に関して、次の二つの状況下で実験を行った。一つはケベック・シティーの中心街に位置する観光客向けの土産物店5店、もう一方は市内の公立中学校5校とした。計10箇所、駅行きの最寄りのバス停はどこか、という質問を英語でした。被験者は土産物店の店員と中学校の事務職員である。結果、土産物店では5人中4人がジェスチャーを交えながらも英語で回答し、残りの1人は、質問の意図は理解したうえで、外へ出て道順を指で示しつつ丁寧なフランス語で説明しようとした。中学校では、5人中2人は英語で回答し、別の2人は不機嫌な面持ちで人差し指を左右に振りながら、ケベックではフランス語を話すようにと述べ、残りの1人は英語が苦手であることを理由に別の者に対応を頼んだ。以上より、日常的に英語発話機会の多い中心街の土産物店では英語に対して強い抵抗感は低く、教育機関でも、英語発話の機会が少ない学校職員は英語発話に対する抵抗、拒絶、苦手意識が強いことが窺われる。ただし、土産物店では生活の中で必要に迫られて英語を使用していることも考えられ、彼らが英語を操ることと異文化への柔軟性が相関しているとは断言しがたい。しかし、被験者の非言語コミュニケーションも考慮するなら、実験結果はケベコワの英語に対する態度の一側面を提示していると言えるだろう。

4 調査—英語習得と文化的アイデンティティーの関係

4. 1 方法論

本研究ではアンケートによる調査を行った。アンケートは、筆者が英語で作成した後、英仏バイリンガルであるフランス語母語話者によってフランス語に翻訳された。アンケートは高等教育機関 Cégep で2006年9月に実施した。回答時間は15分で、英語教師

表 2 アイデンティティに関する設問の要因別分類

要 因	特 性	
言語選択	生活使用言語や名前に使用する言語の選択	民族に対する帰属意識・ 民族アイデンティティ
民族的プライドと帰属	フランコフォン/ケベコワ文化への敬意や連帯意識	
文化的自己アイデンティフィケーション	ケベコワとしての自己認識	
文化的遺産	ケベコワ文化の象徴/出来事に関する知識	文化的自覚・ 文化変容の度合い
文化的区別の気づき	他民族集団との社会的、文化的差異の知覚	

立会いのもと、授業のはじめに行った。内容は以下の 5 部構成である。本稿では、④のアイデンティティに関する設問の分析のみを扱うこととする。アイデンティティに関しては、5つの要因に関連付けられる計 15 の質問項目を設けた（表 2）。

- ①経歴に関する質問（自由回答形式）
- ②英語との接触頻度に関して（1－6 のリカート・スケール）
- ③動機づけに関する三択
- ④アイデンティティに関する三択

4. 2 実施校と被験者

アンケート実施校は、大学進学コースに所属する学生 58 %、職業訓練コースに所属する学生 42 %であり、州政府のケベック州内の Cégep の学力調査によると、当校の学生の学力は各科目州内の平均をやや上回る。アンケートは英語能力別に 4 つに分けられた各クラスで実施し、平均年齢 18.4 歳の学生 146 人を被験者とした。クラスはそれぞれレベル 1 (28 人)、レベル 2 (26 人)、レベル 3 (63 人)、レベル 4 (29 人) であり、最もレベルの低いクラスがレベル 1、最もレベルの高いクラスがレベル 4 である。被験者のなかには、ケベック州以外の出身者 3 人、家庭でフランス語以外を話す学生⁵⁾（英仏二言語を話す学生も含む）が 10 人いるが、10 人とも L1 はフランス語である。

彼らに共通する属性として最も重要なものは、幼少期あるいは生まれた時から、フランス語以外の言語に接しているということがいえる。また、I と J を除く 8 人には日常的な英語接触があるということである。しかし、I と J に関しては、校内で定期的に行われる任意の英語活動に対する参加率が高い。彼らのこうした積極的参加は高い英語習

⁵⁾ 以後、複言語環境の学生と称する。

表3 複言語環境の学生の属性 n=10

家庭使用言語	レベル	出身地	背景	日常的な英語接触	校内任意英語活動参加数(全10回)
カタロニア語 (A)	4	ケベック州	両親の代でケベックに	有	2
スペイン語 (B)	3	チリ	3歳の時、ケベックに	有	7
フランス語と英語 (C)	4	ケベック州	父親がアングロフォン	有	0
フランス語と英語 (D)	3	ケベック州	母親英語教師	有	1
フランス語と英語 (E)	3	ケベック州	父親がアングロフォン。 3年前モントリオールから	有	2
フランス語と英語 (F)	3	ケベック州	母親が語学教師	有	8
フランス語と英語 (G)	2	ケベック州	アングロフォンの 祖父母と同居	有	4
フランス語と英語 (H)	1	ニューブラン ズウィック州	母親がアングロフォン 6歳の時、ケベックに	有	2
ベルシャ語 (I)	3	ケベック州	祖父母の代でケベックに	無	9
中国語 (J)	4	フランス	中国系フランス人。 8歳の時、ケベックに	無	9

得につながっていると考えられる。逆に参加率が低い者に関しては、両親のどちらかがアングロフォンであることが確認できる。アンケート実施校の英語教師は、彼らは単に自身にとって任意の「英語活動は不要である」と考えており、フランス語一言語のみを生活言語とする学生⁶⁾が、「英語は必要ない・英語を話すことは恥ずかしい」と考えて参加率が低いのでは意識が異なると指摘する。つまり、複言語環境の学生のうち多くは日常的に英語と触れる機会を持っており、そうでない者に関しては、学校で提供される英語活動の場に自ら足を運ぶ傾向がある。さらに、英語教師は、各学生の個人的な言語環境の中核となる家庭において、複言語環境の学生の親は子どもの英語習得を重要だと考える、又は言語教育に関心を持っていることを挙げ、フランス語以外を家庭使用言語とする家庭 (A, B, I, J) の親にその傾向が強く見られると指摘する。彼らは成人後にケベックに移住し、フランス語で十分なコミュニケーションができるようになるまで、英語を使用していたために、英語の役割や有用性を実感していることも推測される。

5 調査結果と分析

5.1 家庭使用言語と動機づけ

英語習得に関して、Gardner (2001) は、動機づけとの強い相関性を示唆している。複言語環境の学生の高い英語習得傾向、英語習得と動機づけの強い相関性に基づき、複言語環境の学生の動機づけを考察する。図1は、被験者全体、仏言語環境の学生、複数言語環境の学生の動機づけを比較している。複言語環境の学生の英語に対する統合的要因が、被験者全体のそれと比較して高いことが確認され、統合的動機づけの高い学習者は

⁶⁾ 以後、仏言語環境の学生と称する。

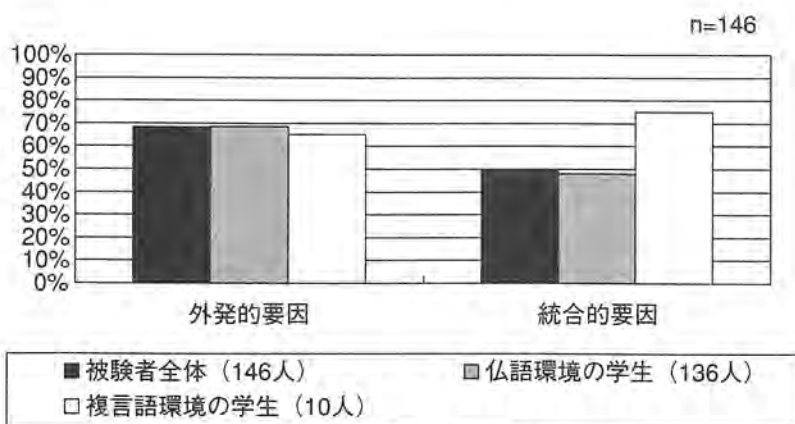


図1 家庭使用言語別動機づけ要因の傾向

ど高い英語を獲得するという先行研究を支持する結果となった。

5. 2 家庭使用言語とアイデンティティー

複言語環境の学生の文化的アイデンティティーに関して、アンケートの項目別に考察した結果が以下である。

①言語選択

設問A) 私のファースト・ネームは仏系である

設問B) フランコフォンでよかったと思う

設問C) 自分の子どもには仏系のファースト・ネームをつけたい

設問D) 自分の子どもはフランス語の学校に通わせたい

言語選択において、仏語環境の学生の 90.4 %、複言語環境の学生の 40.0 %が仏系のファースト・ネームをもっている。次の設問では、被験者全体の 95.2 %がフランコフォンでよかったと回答しており、そのうち仏語環境の学生では 97.1 %、複言語環境の学生では 70 %の学生がフランコフォンでよかったと報告している。さらに、自分の子どものファースト・ネーム言語に関しては、仏語環境では 77.2 %、複言語環境では 10.0 %の学生が仏系のファースト・ネームをつけることを希望していることが分かった。また、自分の子どもの学校教育言語としてフランス語を希望するという設問には、仏言語環境では 83.0 %、複言語環境では 20.0 %の学生が自分の子どもをフランス語の学校に通わせたいという回答が得られた。

②民族的プライドと帰属

設問E) ケベコワであることを誇りに思う

設問F) フランス語はケベック・アイデンティティーの根本的な側面だと感じる

設問G) 英語が流暢なケベコワはケベコワとしてのアイデンティティーの一部を失っている

被験者全体の 91.1 %がケベコワであることを誇りに思うと回答しており、そのうち、仏言語環境の学生では 93.3 %、複言語環境の学生では 60.0 %が、ケベコワであることを誇りに思っていると報告している。これにより、複言語環境の学生はケベコワという民族のあるいは集団的なプライドより、フランス語社会で複言語を使用するという特異なバックグラウンドを背負った個々としての自身のアイデンティティーを尊重する可能性が考えられる。次の設問では、仏言語環境では 94.1 %、複言語環境では 70.0 %の学生がフランス語はケベック・アイデンティティーの根本的な側面であると感じていると回答した。3つ目の設問では、仏言語環境でも複言語環境でも大差なく、それぞれ約 20 %の学生が、英語が流暢なケベコワのケベック・アイデンティティーの欠如を指摘した。また、そう答えた者のうち、88.9 %が英語レベルの低いクラスにいることから、英語能力の高い学生ほど、英語の習得によってケベック・アイデンティティーが失われるという認識が希薄であることも示唆される。

③文化的自己アイデンティティーの認識

設問H) 私は自身をケベコワだと考える

設問I) 私は自身をカナダ人だと考える

文化的自己アイデンティティーの認識に関して、全体の 93.8 %が自身をケベコワだと答え、なかでも、仏言語環境の学生の 95.6 %、複言語環境の学生の 70.0 %が自身をケベコワであるという回答が得られた。続く設問では、全体の 65.1 %が自身をカナダ人だと答え、そのなかで、仏言語環境の 65.4 %、複言語環境の 60.0 %が自身をカナダ人だと答えている。また、レベル3と4に属する学生全体(92人)に焦点をあて、英語習得レベルに着目すると、習得度の高い学生にカナダ人としての自己認識が多発している傾向があった。以上より、カナダ人としてのアイデンティティーは英語レベルが高い学生ほど示しており、自身をケベコワとしてだけでなく、カナダ人としての自己アイデンティファイに対して寛容な態度である可能性が考えられる。

④文化的遺産

設問J) 1960年代に始まった「静かなる革命」に関する基本的な知識がある

設問K) フランス語憲章に関する基本的な知識がある

設問L) 11月の“la Fete des Patriotes”がどういった日なのか知っている

「静かなる革命」⁷⁾、「フランス語憲章」、「la Fete des Patriotes」⁸⁾というケベックの歴史的出来事や記念日に関して三つの設問を設けた結果、いずれの設問でも総体的に、70%～80%の学生が高い認識と理解をもっていることが明らかになった。そして、家庭使用言語別データからは、仏言語環境の学生では77.9%、複言語環境の学生では90.0%が、「静かなる革命」に関する基本的な知識があると回答した。フランス語憲章に関しては、仏言語環境の68.3%、複言語環境の80.0%が基本的な知識を持っていると回答した。“la Fete des Patriotes”においては、知っているという回答率が低かったにも関わらず、仏言語環境の35.2%、複言語環境の50.0%が知っていると報告した。以上より、複言語環境の学生の方がケベックの歴史的出来事や記念日について理解しているということが言える。

⑤文化的区別の気づき

設問M) ケベコワはケベック州外のカナダ人とは異なるアイデンティティーをもっていると感じる

設問N) 私がケベコワ以外の人と結婚することを、家族は喜ばしく思わない

設問O) ケベック州はカナダの他州とは異なる文化を持つのでカナダ連邦から独立するべきだ

被験者全体の82.9%がケベコワのアイデンティティーをケベック州外のカナダ人のそれと差別化しようとする傾向が明らかにされた。これに関しては、仏言語環境の学生と複言語環境の学生の間で回答に大きな差は見られなかった。次の設問では、仏言語環境の10.0%、複言語環境では0%が、自分がケベコワ以外の人と結婚することになると、家族は喜ばしくおもわないと回答している。さらに、他州との文化的特異性のためのケベック州独立に関しては、仏言語環境の39.0%が、複言語環境の20.0%がケベック州の独立を支持すると答えている。以上より、文化的区別の気づきに関して、仏言語環境の学生と複言語環境の学生で大きな差異はないものの、仏言語環境の学生の方が、ややケベコワを他民族と差別化する傾向が窺われた。

⁷⁾ 英仏戦争以降続く英仏二言語問題に関して、ケベックの社会情勢が大きく変わった1960年代のことを指す。まず、1960年に自由党によって設置された州教育行政を進める王立教育調査審議会、 balan 審議会の第二報告書では『母語』という章を設け、米国を含む北米大陸におけるフランス語母語話者がマイノリティであることを浮き彫りにし、言語としてのフランス語の変形の問題とフランス語社会衰退を危惧した。フランス語憲章の制定はこうしたケベック・ナショナリズムの高揚を受けている。

⁸⁾ パトリオットの祝日は、ケベックにおける愛国者の反逆 (Patriotes Rebellion) の記念日。

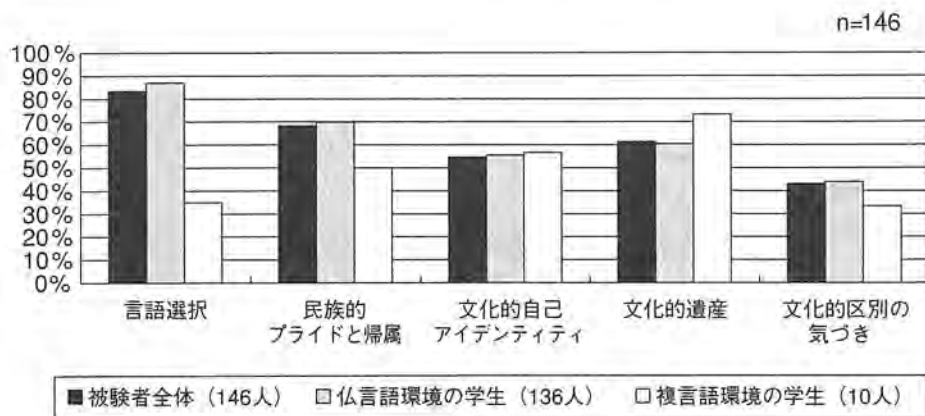


図2 家庭使用言語別アイデンティティの要因の傾向

さらに、図2では、被験者全体、仏言語環境の学生、複数言語環境の学生のアイデンティティを表2で提示したアイデンティティの要因別にグラフ化した。

複言語環境の学生のアイデンティティの特徴として、一つ目に、言語選択に対して抵抗感が少ないことが言える。こうした言語選択に対する寛容な態度は、学校と家庭という異なるドメインにおいて異なる言語を利用するという環境に身を置くことによって育成されたと考えられる。二つ目に、ケベコワとしての民族的プライドや帰属意識は仏言語環境の学生に比べると明らかな強さを示さず、家庭でフランス語以外を使用することで、他の言語および文化に対する帰属意識も併存していることが窺われる。三つ目として、文化的遺産に関する知識が豊富であるという点である。四つ目は、文化的区別の気づきは低く、ケベックの文化と他の文化の隔たりをあまり感じていないという点である。つまり、他の文化を身近な存在と捉え、文化間の差異に対する抵抗感が低い。

6 まとめ

6.1 結論

複言語環境の学生にとって、言語環境が英語習得と文化的アイデンティティにどのように影響しているのか、という問題を探求するという本研究の目的は、次のように結論づけられる。

複言語環境の学生と仏言語環境の学生を比較することで、複言語環境の学生のアイデンティティや言語に対する意識を浮き彫りにすることができた。動機づけの中でも、特に統合的要因が英語習得と強い相関性があり、統合的要因は学習者の言語習得を促進させる態度の形成を支えている。家庭使用言語がフランス語以外、あるいはフランス語

を含む複言語のケベコワに統合的要因が顕著に示されたことは、複言語の能力をもつことで異文化に対するバイアスが減少していると解釈できる。そして、その性質こそが、学習の仕方や、他者・新しい状況に適応する能力を高めると考えられる。つまり、異文化への柔軟な人間形成を通して母語以外の言語に対するバイアスを減少させ、スムーズな学習の動機づけが起こる。

アイデンティティーに関しては、被験者であるケベコワの多くに強い民族的アイデンティティーが確認された。仏言語環境の学生のケベック・アイデンティティーは複言語環境の学生のそれと比べると強いものの、ケベック・アイデンティティーが移民や複言語環境のケベコワにまで浸透していることは、ケベックの民族的アイデンティティーの強さを改めて示していると言える。また、文化的自己アイデンティティーを除く他の項目においては、仏言語環境の学生と複言語環境の学生では回答傾向が異なった。最も顕著な相違は言語選択において見られ、複言語環境の学生は、自身や子どもの習得言語に対して特定の言語にこだわらず、幅広い言語選択の可能性を示した。このような言語選択の態度と同時にケベック・アイデンティティーが併存しているということは、複言語環境の学生が、アイデンティティーを言語にのみ依拠するものではないと認識していると解釈される。さらに、複言語環境の学生ほど、ケベックの歴史的出来事や記念日に対する理解があるという側面においても、ケベック社会の一員としての自己認識が説明される。また、このことは、幼い頃から家庭言語とは異なるフランス語文化に統合してきたことが、さらに別の文化への統合的指向に対する抵抗感を減少させている可能性を示唆する。以上のアンケート回答傾向は、家庭使用言語が英語習得とアイデンティティーに与える影響を明らかにした。

複言語環境に身をおくケベコワは家庭環境などを理由とする少数であるが、フランス語のみを日常生活で使用するケベコワにとっても、別の側面から言語態度の育成をはかる可能性が示唆される。例えば、複言語環境の学生の多くに見られた特徴として、異文化への柔軟な人間形成が挙げられた。Brown (1987) は、第二言語習得における文化変容のモデルで、個人の人間形成は社会状況によって変化するだけでなく、周りの人間の態度や環境の影響を受けるため、語学教師の果たす役割の重要性を強調している。教師や親の英語に対する態度が否定的であれば、学習者である子どもはその影響を受ける。したがって、学校関係者や親の教育が学習者にとって、特定言語に対する否定的態度やイデオロギーの媒介となり、学習の動機づけを妨げるのではなく、家庭や学校での教育を通じて柔軟な人間形成を養う姿勢が必要になるのである。

6. 2 本研究の問題点と今後の課題

調査方法はアンケートであったが、アンケート作成において、質問項目、形式、分量について更なる検討が必要である。言語をとりまく意識や文化的アイデンティティーを婉曲的に問うことで、それらの本質をより正確に抽出することが課題である。

今回のアンケートのデータに基づく複数言語環境の学生たちへの着目は、ケベコワにおける第二言語としての英語習得にについて一定の観点を提示するものと考えるが、今後は、より大きい被験者群を扱うことで、さらに正確な結果を出すことが求められる。また、一言でフランコ・ケベコワとは言っても、①英国による占領以前に定住していたフランス人の子孫、②その後移住してきたフランス人、③フランス人の子孫ではないが、フランス語を母語とする人々などがあり、フランス的文化への執着度も一様ではないため、個人の経歴や背景をより詳細に配慮することができるインタビューを手法とする研究を検討する。また、本研究では主に英語文献を参考にしたが、フランス語で語られるケベック・アイデンティティーに対する理解を深めるためには、フランス語の文献を取り入れていくことも必要である。

6. 3 おわりに

日本人である論者が、ケベコワの英語習得と文化的アイデンティティーに関心を持ったのは、日本人の外国語に対する言語態度を振り返る必要性に通じるものを見出したからである。ケベックを訪問した際に感じたケベコワの文化的アイデンティティーや英語に対する態度は、今まで抱いてきた問題意識を具体化するきっかけとなった。当然、日本とケベックでは社会的状況は大きく異なるが、ある特定の言語がその地域 / 国で主要な言語としての立場にあるという共通点を持つ。ケベックにおける英語習得の問題を外国人の視点から取り扱うことで、日本における英語習得の問題がまた違った側面から見ることができるのではないかと考える。

主要参考文献

- 長沼君主「言語学習における社会的文脈と動機づけ」『心理学評論』46 巻 3 号、pp. 108-120、2003。
- Brown, H. D. (1987). *Principles of Language Learning and Teaching*. NJ. Prentice Hall Regents.
- Dörnyei, Z. (2002). *Motivational strategies in the language classroom*. Cambridge University Press.
- Gardner, R. C. and Lambert (1972). *Attitudes and Motivation in Second Language*

Learning, Newbury House.

Gardner, R. C. , Paulsen, N. , Gallois, C. , Callan, V. J. , Monaghan, P. G. (2001).

Communication in organizations: An intergroup perspective. Robinson, W. P. & Giles, H. (Eds.), *The New Handbook of Language and Social Psychology*. pp. 561–584. Chichester, UK. Wiley.

Larrivée, P. (2003). *Linguistic Conflict and Language Laws: Understanding the Quebec Question*. Palgrave Macmillan.

Norton, B. (2000). *Language and Identity*. London. Longman.

Taylor, C. (1991). *Ethics of Authenticity*. Harvard University Press.